

## 巻頭言

## 「壁」を通り抜ける術

比較文化学科長 鄧捷

新学期のはじまりです。入学、進級おめでとう。  
「一年の計は春に在り」。これからの大学生活、どんな計画を立て、どのように成長するのでしょうか。さて、学科長は中国人ですから、中国らしい仙人修行の話をしましょう。

昔、王という旧家の七男坊は道教に凝り、労山に仙人がたくさんいると聞き、修行に出かけた。労山の頂きにある物寂しい道観（道教寺院）に辿りつき、真っ白な髪が項に垂れた神々しい道士に弟子入りを申し入れたが、「育ちが育ちだから、とても辛抱できまい」と言われ、「できます」と誓った。王は道観に住みこみ、斧をあたえられ、薪たきぎをとってくるように命じられ、ひと月あまりするうち、手足は豆でござごわになってしまった。

これはたまらんと家に帰ることを考えはじめたある日の夕方、師匠が二人の客と酒を酌み交わしているところに出くわした。日がとっぷり暮れて灯がないと、師匠が紙をまんまるく切り抜いて壁に貼り付け、その紙がたちまち月にかわってこうこうと室内を照らした。酒がどんどん進むうち、客は箸を月の中に投げ入れると、ひとりの美女が月光の中から姿を現し、軽やかに霓裳羽衣げんしょうういの曲（天女の舞）を舞って歌った。

これを見た王はすっかり感じ入って、やはり修業を続けようと思った。しかし、師匠は何一つ教えてくれるでもない。とうとう辛抱できなくなり、家に帰ろうとした。帰る前に、「これだけ苦勞したのですから、ちょっとした術でもご伝授いただければ」と、師匠に壁や塀を通り抜ける術を乞った。師匠は笑って「宜しい」と言うと、呪文を教えてくれたので、言われたままに唱えると、「それ、入ってみよ」と言った。王は塀の前でぐずぐずしているところ、かさねて「頭から突っ込んでいってみよ、ためらったらいかん」と言われ、二、三步退がり、「やっ」と駆け込むと、何の手応えもなく、振り返ってみれば塀の外に出ていった。王は大喜びして、礼を言って家に帰った。

家に帰ると、伝授してもらった術を吹聴したが、女房に信じてもらえず、「それなら」と、塀から数尺離れたところから一気に駆けこんだ。ところが、頭を塀にぶつけてはったり倒れてしまい、額に大きな瘤ができていた。女房にさんざんからかわれ、恥ずかしいやら腹が立つやら、「あの老いぼれめ、よくも騙しおった」と罵るばかりだった。（立間詳介編訳『聊齋志異』、岩波書店）

いかがですか。いろいろと考えさせてくれる話ですね。一日にして壁を通り抜けることはどうてい無理です。きっと、無駄と思われる日々の薪とりは欠かせないのでしょう。

さて、比較文化学科もある意味で道観ならぬ道場です。いろんな国の言語、文化、歴史を学び、文字通り、異文化の「壁」を通り抜ける術を得るために修業するところです。神々しい白髪しろかみの教授もいれば、若々しい黒髪くろかみの教授もいます。是非たくさんの「術」を学ぼう。そのために、日々の「薪とり」はおろそかにしてはいけません。皆さんにとっての薪とりは、もしかして、外国語の単語や文法の学習、レポートの書き方、授業のコメント、ゼミの発表、つまらなくて役立ちそうもない授業の出席……かもしれません。各自答えを見つけてみましょう。

ちなみに、上の話は『聊齋志異』の「労山道士」から。作者は清の初めほしやうれいの蒲松齡。労山（嶗山）は山東省青島市にあり、「海上第一仙山」と称される道教の名勝地です。



## あるく みる きく しるす (後編)

※前編は Vol. 28に掲載

### 本学科教員 大越公平

専門分野は文化人類学 (社会人類学、宗教人類学)  
担当科目は文化人類学 I・II、民俗学、ゼミナール、他

定年を迎えるにあたり、10の質問をいただきました。日ごろは漠然と思っていることをしっかりとした目標にするためのよい機会です。「Q. ……」には、いただいた質問の言葉そのものを載せています。思いつくまま記してみます。

### ◎フィールドワークについて

**Q.** 研究していて面白かった地域はどこか。

**A.** 長期滞在の地域もあり、短期滞在の地域もありますが、それぞれに興味深い地域ですし、これからも出かけたと思っています。訪れた地域が多いのも、まだ訪れてみたい地域がたくさんあるのもインドネシアです。印象深い地域はカリマンタンのダヤクの人びとの山村です。近くの町からオートバイ・タクシーに乗り、その後は山道を2時間かけて歩きました。さまざまな動物の鳴き声が聞こえます。姿は見えません。怖いような、出会ってみたいような気持ちで歩きました。焼畑耕作を行っている村で畑は焼き終えたところもあり、まだ火が燃えているところもありました。人懐こい人びとに会えました。

**Q.** 今までフィールドワークを行なっていて興味深かった経験は何か。

**A.** 文学部の国際交流企画でかけたタイの山岳地帯で出会った人びとです。チェンマイより高原地帯を歩き、ミャンマーとの国境をなす山々が眺められる地域にあったカレンの人びとの村は印象深いですね。森島先生、富岡先生、研修旅行に応募した6名の学生と一緒に。滞在中にキリスト教の洗礼式があり、参列し、お祝いの席で赤米のおこわが出されました。今でもその素朴な甘みを思い出します。

学生時代は埼玉県両神村 (現在、小鹿野町) で調査し、こんにゃく栽培に関心をもちました。米

作農家が一般的な時代でこんにゃく栽培は珍しく、米作には不向きな土地で努力する人びとの姿を知りました。

**Q.** 好きな食べ物は何か、おすすめのお店はどこか。

**A.** もちろん好きな食べ物ですが、印象深い食べ物を取り上げましょう。

横浜はナポリタンの発祥地です。毎年夏に一回、妻の誕生日にホテルのカフェで食べます。夏の企画としてナポリタン、ドリア、プリン・ア・ラ・モードの3品が揃った「大人のお子様ランチ」を楽しんでいます。この時期ならではのイチジクのケーキを買って帰ります。

果物としては、ドリアンとともにパラミツ (英語では、jack fruit インドネシア語では、Nangka) です。インドネシアの諸都市のスーパーで販売されている調理済のものを食後のデザートとして好んで食べました。ロンボク島のプサントレン (イスラム教の学校) でいただいたスープにもナンカが入っていて、サーモン風の味? がする美味しいものでした。私だけがそう感じたのかも知りません。なぜそのように感じたのか今でもわからないままです。特別な調味料が入っていたのかなあとも思っています。スマトラ島のバンダ・アチェでは、市場でカツオを買って来て、ザボンの果汁をかけて食べました。私が訪問した数年後に、バンダ・アチェは大地震に見舞われました。胸が痛みます。一日も早い復興を。

日本文化探訪では那覇の市場で魚（ミーバイ等）を買い、2階の料理店で調理してもらい、メンバー全員で沖縄料理を食べました。2018年夏のゼミナール（3年生）合宿で食べた箱根・大涌谷の黒卵も。かすかに硫黄の匂いが。メンバーが買ってくれました。

**Q.**先生の座右の銘は何か。

**A.**「あるく みる きく」です。学生時代には、民俗学者、宮本常一が編集した『あるく みる きく』（日本観光文化研究所）という雑誌が刊行されて

いました。近畿日本ツーリストに就職した大学の先輩が勧めてくださった雑誌でした。若い研究者が日本の各地の民俗、あるいは海外の諸地域の民俗についてフィールドワークをして、作成した民俗誌が掲載されていました。その民俗誌には、臨場感のある綺麗な写真が添えてありました。私は、「聞書き」研究のための「教科書」として愛読しました。座右の銘としては、「あるく みる きく」に加えて、記録することを怠らないために、「あるく みる きく しるす」としたほうがよいとも思っています。

## ◎比較文化研究を学んでいる学生へ

**Q.**学生に一言。

**A.**釜利谷（文庫キャンパス）での4年間の時間を大切にしてください。かけがえのない時間です。講義で使ったパワーポイントの画像の最初には、四季折々のキャンパス風景を取り上げました。桜並木、行きかうスクールバス、緑豊かな樹木、オリーブ、周囲の山々の緑と紅葉、真っ青な空と白い雲、数回の降雪。ここが原点です。

**Q.**学生に読んでもらいたい本。

**A.**先行研究としての著名な研究者の著作を読んでもほしいのは、もちろんですが、博物館、美術館等の『図録』や県および市町村の教育委員会が編集した県史や市町村史も読んでほしいですね。フィールドワークを重ねた人びとの調査データをまとめた文章を参考にしてください。

## ◎さあ、これからは

**Q.**これからやりたいことは何か。

**A.**さらにフィールドワークを続けることです。高齢になっても歩ける限り、「あるく みる きく しるす」です。気の向くままに計画を立てられます。

さあ、どこへいきましょうか？数年後には、日本各地で、あるいは諸外国で活躍しているみなさんに現地で出会えるかもしれません。楽しみにしています。



2016年9月4日  
ラオス唯一の駅、タナレン駅



2018年10月24日  
学院のオリーブ、いつまでも

# さようなら ♪ ♪ また 会う日まで！

— 最初は 誰でも 白帯 —

本学科教員・空手道部部长 矢嶋 道文



国際松涛館「斎藤道場」北海道合宿  
最終日 本部指導員と

本作り〈1988～2003〉を終えての稽古再開で、想い出の合宿！

師範は国士館高校出の猛者として知られたが、その師範にも白帯の時があった。



豊田勇毅（比較文化4年）の世界大会  
（アイルランド 2017年）

1回戦、ラフな相手（彼らは勝つためにはいかなる戦いも挑む）に勝っての3回戦目、同点からの再試合に、先ずは「先取」（先に勝つ）（1 - 0）。「これで勝った！」と思った矢先の敗退に「言葉を失った」。〈空手協会の試合は2ポイントで勝利。上段〈顔面〉攻撃有り）。

思い出に残る世界大会の参加者（世界各国からの代表）も、最初は全員が白帯である。



## 貝原益軒「大和俗訓」



『大和俗訓』の序に、  
「高きに登るには必ず麓よりし、遠きにゆくには必ず近きよりはじむる理あれば」とある

貝原益軒（江戸時代の漢方医）は他に『大和本草』が知られる。

益軒はこの『大和俗訓』の中で、山に登るのも、はじめは「麓から」といった。どんなに高い山でも最初は「標高差ゼロ」である。山頂へは1歩1歩登るほかに道はない、といった。

益軒は儒者でもあり『慎思録』という本がある。益軒はその書のあるところで「およそ世間のすべてのことは、できる限り初心をわすれてはならない」ともいっている。最初はだれでも初心者（白帯）なのである。

本日の卒業式にあたって、皆さんが何らかの先頭集団者であっても、初心を忘れることなく謙虚に次なる山をめざして欲しいと思う。また、全くの新しい道であっても決して恐れないで欲しい。「最初は誰でも白帯」。卒業おめでとう！

（昭和44年 経済学部卒業）

# 国際交流プログラム 中国雲南省昆明(こんめい)市を訪ねて

本学科教員 菅野 恵美



2018年度の国際文化学部主催「国際交流プログラム」(12月25～29日)では、矢嶋道文先生と洪涛先生(昆明理工大学講師)の引率の下、7人の学生が中国雲南省昆明市を訪ねました。昆明は「春城(春の町)」との誉れも有るように、年間の平均気温が16.5℃と温かい気候に恵まれた都市です。

雲南省は中国の西南部の雲貴高原(平均標高1000～2000m)に位置し、省都は昆明市です。この雲貴高原はインド亜大陸の衝突によるヒマラヤ造山運動に伴い隆起した地域ですので、西北はチベット高原と連なり、6000m級の山脈が林立し、東南方向にかけて標高が低くなると

いう地形をしています。ですので、雲南省には多様な環境が生まれ、天然資源の宝庫です。また、雲南省には多様な人々が居住し、漢族以外に25もの少数民族が暮らしています。

雲貴高原の地表は石灰岩のカルスト地域なので、盆地がたくさん形成され、それぞれが集落を形成し、その最大の盆地が昆明です。また、石灰岩が溶解してできた、奇岩怪石の雄大な景観が広がる「石林」(世界遺産)が近くにあります。また近隣の雲南省最大の湖「滇池(てんち)」は地盤運動でできた陥没湖で、風光明媚だけでなく、水産・農業・発電に利用されています。

昆明で学生たちは昆明理工大学の学生と交流会を開き、また、石林・滇池や少数民族村を見学しました。以下、参加した学生の感想(抜粋)を掲載します。



雲南省最大の湖「滇池(てんち)」



石灰岩が溶解してできた「石林」

## 実際に交流することで、親近感・理解が増した

個人的には、日本で報道されている中国の印象と、実際に現地を訪ねて感じるものとの比較を大きなテーマとしていました。(略) 私たちはこれらの情報から中国という国、そしてその国民に対して警戒心を持っていましたが、現地の大学生

との交流を通じてその必要は無いのだと確信しました。学生からの最初の質問で、「日本人の中国に対する印象は？」と聞かれたときは少し戸惑いましたが、話をしてみるとやはり政府間で考える関係と、一個人として考える関係とは大きく差があることが分かりました。日本のアニメ文化をよく知ってくれているのも伝わりましたし、日



昆明理工大学



昆明理工大学の学生と交流

本語自体をよく勉強して話す努力をしてくれた学生もいて、とても嬉しく思いました。大学内の案内をしてくれた際も私たちが日本語で質問したことに対して丁寧に日本語で答えてくれました。お互いが自分の国や地域に対して愛を持っており、そのうえで相手の国のことを尊重しているのだと強く感じましたし、この国際交流企画の意味を果たせたような気がしました。

(千葉航太)

## 中国語で交流できました

今回の国際交流で中国を訪れるのは2回目でした。前はワールドスタディーで北京などに行きましたが、前回訪れたところとは雰囲気などが違い改めて勉強になりました。(略) 前回ワールドスタディーで学生と交流したときは中国語で話すことができませんでしたが、今回は勉強していったおかげで、少しだけですが中国語を話すことができ、個人的に収穫があった良い交流でした。

(長渡強志)

## 価値観が良く似ていることに気がつきました

(昆明理工大学の学生との) 交流会では、私は同い年の英語専攻の学生と仲良くなり、終始英語で会話を楽しみました。最初はキャンパスのことや学生生活のことについて話しました。打ち解けていくうちに様々なことに関する価値観がとても良く似ていることに気がつきました。そこで私たちは少し踏み込んで、お互いの国に対する考え方や偏見について意見を交換しました。ここでも驚いたことに意見が一致しました。私は外国に対するイメージを政治的な側面だけで判断するのは誤りで、また集団を見て個人を決めつけるのは正しくないと考えています。彼も同意見でイメージだけで中国人は日本が嫌いと思わないで欲しいと考えていました。彼は将来中国がもっと国際的に自由になって欲しいと願っていました。

(高橋友哉)



辛い雲南料理

## 中国の別の面に触れて魅力を感じた



少数民族村で象に乗る矢嶋先生

ワールドスタディーにおいて、西安・北京という中国を代表する都市を訪問し中国という国の中心部に触れました。今回は少数民族の多く暮らす雲南省ということで、北京などとはまた違った中国に触れられることを期待しました。(略) 1年生の時、中国語の授業で「你是南方人吧？」という文章が出てきて「同じ中国人、ましてや日本人と中国人の区別もつきにくいのにわかるのかな」といった考えを持ちましたが、それらの言っていることが大げさではないということ、身を以て感じました。(略) 北京や西安とは違い、人も優しく中国という国の魅力を感じました。

(多々良海斗)

## 中国人の私も初めて知った中国の多様性

今回、昆明に行ったのは初めてなので、中国人の私もこの町に興味を持っていました。少数民族村に行った時、私も聞いたことがない少数民族に会うことができました。少数民族の踊りを見た時には、この世界にはこんな美しい物があったのかと驚きました。美しい踊りに加え、独特の音楽によって、少数民族の特長を表現していました。

(略) 日本人の学生たちが中国にどう思うか、という点も実に興味深い点でした。

(宋博洋)

## 少数民族の普段の暮らしを見ました

少数民族が多くいる地域ということで、身構えていた部分がありました。少数民族の文化は冠婚葬祭の時に見られることが多く、普段は洋服を着て普通の生活を暮らしていました。私の中で少数民族という人達の印象が変わりました。(略) 交流することが大切であると今回感じることができました。自分の目で見て、耳で聞くことで理解することができ、いいプログラムであると思いました。

(水井聖哉)

街には普通の格好をした様々な民族の人たちがいることを知りました。(略) 今回参加して一番感じたことは、現地に行ってみなければわからないことばかりだということです。住んでいる人やその人柄、料理の味、気候など様々な発見ができました。これから日中関係も自分で見たものをものさしに意見を考えていきたいです。

(武内瑞樹)

# 合格しました！ 「国内旅行業務取扱管理者」取得

## 国内旅行業務取扱管理者体験記 ————— 本学科4年生 武内 瑞樹



私が、国内の旅行業務取扱管理者試験に挑戦しようと思ったきっかけは2つあります。1つ目は、大学入学前の学校のパンフレットに書かれた旅行業務取扱管理者の資格についての記事を見たときです。比較文化学科の選択科目で旅行業務取扱管理者試験の科目があり、別の講座をわざわざ受講することなく単位として履修しながら勉強できるところに私は惹かれました。2つ目は、私は高校の修学旅行に行った時、班別研修の計画を立てて実行するという体験から旅行業に興味をわき、旅行に携わる仕事を将来はしたいと考え、その時に旅行業務取扱管理者の資格を知ったことです。就職活動などの今後の動きも視野に入れて取得を目指しました。

実際に資格の勉強では、旅行業務取扱管理者の授業を履修するだけでは足りないので、放課後の学習時間がとても重要でした。私は、資格のチャレンジに一度失敗して2回目で取ることができました。学校の選択科目で教えてくださった担当教員の方にたくさんの過去問をいただき、それをひたすら解き、問題の形式に慣れていきました。

試験科目は、業法、約款、実務（地理）があるのですが、実務の地理の勉強が一番大変でした。2回目のチャレンジの時の地理は、早い時期からコツコツやっておかげでしっかりと対策ができました。この資格は、早期対策や過去問が非常に重要であるので、次の総合の資格取得に向けて、これまでの経験を生かして合格まで辿り着きたいと思います。

## 受賞しました！ 城西大学英語スピーチコンテスト3位、功労賞（関東学院大学）\*

## 第8回城西大学英語スピーチコンテストを終えて ————— 本学科4年生 鈴木 恵里香

先日、第8回城西大学英語スピーチコンテストに参加してきました。私としては、初めてのスピーチコンテストでとても緊張しました。

出場者には、数々のスピーチコンテストに参加しては、優勝しているような人も多く、不安の気持ちでいっぱいでした。また、予選は112名にもおよび、大学の部からは私を含め7名通過いたしました。その予選結果通知は本番の1週間前に郵便で届き、私はまさか予選通過すると思っていたので、練習もほとんどしていないまま本番を迎えました。

スピーチを行う前に、各自自分のマイクの位置調節をする時間をいただけるのですが、どの位置が正しいのかわからず、本番ではマイク位置が思ったよりも遠く、姿勢を曲げた状態でスピーチをすることになってしまいました。それが気になり、スピーチでは大切なジェスチャーでの表現がうまくできず、緊張と焦りでスピーチ内容も端折ってしまい、スピーチ時間である6分よりもずっと早くスピーチを終える結果となってしまいました。しかし、唯一自信のあった英語力が功を奏したのか、結果は3位。表彰式で、壇上で自分の名前がなかなか上がらず「え、え、まだ残ってる。うそでしょ。」という気持ちでした。少しの間でしたが、練習に付き合ってくくださった先生たちに感謝しています。これを機に、またスピーチコンテストに参加して、1位を獲りたいです。

また、スペシャルゲストとして来てくださった、大手前大学現代社会学部1年生の中西健志さんに感謝いたします。彼はスピーチで自身のダウン症について、そして障害を持って生まれたことによって今まで経験してきたことをスピーチで熱く語ってくださいました。私は、彼の熱いスピーチを聞き、感動して思わず号泣してしまいました。彼のスピーチが終わるや否や、泣きながら彼のもとに飛んでいき「素晴らしいスピーチをありがとうございました。」と言いました。そして、彼のお母さまが「一緒に写真と撮ってくださいませんか?」と言ってくださって、一緒に写真を撮りました。

今回参加したスピーチコンテストは私にとって大きな経験となっただけでなく、素敵な出会いもありました。この思いを胸に、これから社会に出ても頑張っていきたいです。



## 発表要旨：「天使のような笑顔」(Smiles Like Angels)

皆さんはダウン症についてどう考えますか？今まで考えたことはありますか？このスピーチでは、私が出会ったダウン症の方々との経験をお話したいと思います。ある日、仕事帰りにバス停でダウン症の男性が私にサインを求めてきました。また、別の日には同じくダウン症の小さな女の子が私のところに来て、突然「きれいな人」と笑顔で言いました。二人の笑顔はまるで天使のようでした。ダウン症の彼らの心はとても純粋で美しく人を幸せにする笑顔を持っています。そして、彼らはなんのためらいもなく話しかけるといふ勇気を持っています。そして、その勇気が私たちに彼らの美しさに気づかせてくれるチャンスをくれるのだと思います。

(\*この成績により、鈴木さんは本学の「功労賞(課外活動)」候補に選ばれました。)

## 就職活動と私

本学科2018年度卒業：山下 海音

就職先：株式会社廣記商行



私が就職活動で気を付けたことは自称です。男性だと特に「俺」という自称を多用するため、面接時「私」と慣れない言い方をすると、感情の入り具合や自分らしさが崩れてしまい、上手く喋ることができなくなる恐れがありました。なので、「私」ではなく「僕」と言い換え自分自身の話す内容に感情や自分らしさが表れるようにしました。

実際の面接で一番聞かれることは、大学生活で何をしてきたかです。この質問に関して、四年間続けて行った学生メンターやオープンキャンパススタッフの活動で得た多くの経験をもとに話しました。

社会では、様々な人と仕事をするため、一番求められるものはコミュニケーション能力だと思います。大学ではサークル・部活以外の団体で何かをすることはないので、大学四年間続けたこの経験が思い出でもあり、自分自身の大きな武器であると思いました。

以上のことを積み重ねていった結果、私は就職活動を自分の納得する形で終えることができました。

本学科2018年度卒業：関 雄大

就職先：金融系

### ① 3月からの本格的な就職活動

3月の情報解禁からは、興味ある企業に対してはとりあえず説明会に参加しました。参加したことで「この業界自体違うかも」、「ここで働くイメージができたから選考に進もう」など気持ちの変化があります。実際に私は3月以降に第1希望の企業が何度か変わりました。今思うと就活は「百聞は一見に如かず」という言葉がぴったりです。とにかく自分の足で雰囲気を感じることをおすすめします。もちろん、実際に働いてみないと分かりませんが、自分の目で確かめることで私は自分に合う企業に就職できたと思っています。

### ② 就活期間の気持ちの持ち方

3月に情報解禁されるまでの準備期間は、私の場合、割とマイペースにやっていた記憶があります。やっていなかった訳ではなく、気持ちに余裕を持って準備をしていました。

私は多くの企業が面接を開始する6月に照準を合わせて様々な準備をしました。面接が始まる期間は企業によってそれぞれです。志望する企業がいつ頃に面接を開始するのかをはじめに確認しておくことで逆算して準備ができます。

対策する事が多いため、面接までにモチベーションを保つことを意識していました。ある程度モチベーションが上がったら保つことを意識していました。私としてはそこからまた上げる必要はないと思います。3月以降も息抜きとして友達と遊びに行ったりもしていました。とにかく燃え尽きてゼロの状態にならないようにしていました。

ダメだったら次の企業を探して、活動を切らさないようにしていくことが重要です。



## 講義「東アジア文化論」での謝玉進先生の特別講義

本学科教員 大内 憲昭

2019年1月15日、「東アジア文化論」の最終講義に中国・北京にある中央財経大学の准教授である謝玉進先生を招聘し特別講義が行われました。謝先生の専攻は哲学・思想であり、本学経済研究所の客員研究員として研究をしています。

特別講義では『文化中心としての北京』と題して、第一に「中国の政治の中心」「中国の文化の中心」「中国の国際交流の中心」「中国の科学技術のイノベーションの中心」の4つの面から北京の概要を話されました。第二に「文化の中心としての北京」として①中国の高等教育の規模、②中国高等教育の理念、③中国の高等教育への投資、④中国高等教育の卒業生数、⑤中国高等教育の現状を紹介され、最後に「学生の皆さんが中国へ来られて交流し、中国の文化、中国の大学を体験し理解することを歓迎します」と結ばれました。

謝先生の講義は中国語で行われたため、通訳を大学院文学研究科比較日本文化専攻の留学生である鄭秋迪さん、儲奕希君にお願いしました。

講義を聞いた学生の感想を一つだけ紹介しましょう。



中国の先生の講義を実際に受けるのはすごく新鮮でおもしろかった。中国の文化には様々なものがあった。宮廷の文化、外国から来た文化など一つだけではないんだと思った。文化から教育につながって中国の高等教育についてお話を聞いたが、私が生まれた頃から今にかけて人材が増えていたのを見て、108万人から685万人という数字の凄さを知った。私から見て、中国の人は勉強ができる、頭がよい、教育の質も高い、というイメージがあります。とくに工学部のグラフを見ると中国の教育のレベルの高さがよく分かるし、世界一なんだと実感した。中国の教育理念である“双一流”（「世界一流大学、一流学科構築」という中国の高等教育政策）というはすごく分かりやすいプログラムであると思う。それに学生に対するサポートも厚く、勉強をする環境がよいのだと感じた。私は大学生になって一人暮らしだけど、中国の学生は全員、寮に入る違いもあるのだと思った。

日本の大学は公立、国立でも年間でお金がかかり、私立だともっとかかるし、高校でもお金がかかるのに、中国の教育はすごくサポートがあって羨ましい反面、その分、期待がかかるのかなと思った。これほどの中国の教育レベルがもっとこれから発展していくと思うと、残りの学生生活をしっかり学べることは学んでいきたいと思った。日本と中国の文化は違うところはたくさんあるだろうけれど、お互いにいろいろなことを大切にしているのだなと思った。

(本学科3年生 佐藤 彩)



左端から渡辺（経済学部教員）、謝玉進氏、鄧捷・大内（共に本学科教員）、鄭さん・儲君（大学院生）

## 新任教員挨拶



本学科教員 相原 健志

4月に着任致しました、相原健志（あいはらやすし）です。私は文化人類学、スポーツ人類学、ポルトガル語圏の文化研究を専門としています。なかなか一つの分野や用語ですっと表現できずいつも苦労していますが、この三つの領域の重なるところで研究してきました。

博士課程以来、サッカーのトレーニング理論「戦術的ピリオダイゼーション」と呼ばれるものを研究対象にしてきました。私はこの理論をサッカーに限定せず、集団・共同体がいかに関係されるかをめぐる「社会」思想であると捉えました。さらに、この理論にもとづく実際のトレーニングを見る必要があると考え、これが開発されたポルトガルにてフィールドワークを行いました。研究の方法論や背景に関しては文化人類学を強く意識し、スポーツを素材とするからスポーツ人類学、フィールドを考慮すればポルトガル（語圏）研究でもある、となります。ちなみに、私のポルトガル語はポルトガル北部訛りが強い一方、スペイン語はメキシコに留学したのに訛りがないとよく言われます（実はこれ、褒め言葉とは限りません！）。

以上のように研究の素材はサッカーではありますが、私は必ずしもサッカー研究者としてだけ自己同一化しているわけではありません。その素材をもとに文化人類学とスポーツ人類学における分析概念や方法論を再構築する課題にも取り組んでいますし、最近ポルトガル人類学の学説史をその政治性という観点から辿り直す研究も始めました。やはりこの三つが重なり合うところが私の生息領域なのだと感じ、色んな土地やテーマをフラフラしてきたせいとはいえ、やっぱり一言で語るのは難しいなあ、とここまで文章を書いて改めて感じます。

とはいえ、私自身がサッカーから文化人類学へ、スポーツ人類学へ、ポルトガル語圏研究へと興味を広げていったのと同様に、学生たちにも、一つ学んだことを別の分野へ、別の地域へ、別の文化へとつなげて理解する姿勢を身につけて欲しいと思います。腰を据えて一つのことにじっくり取り組みつつも、視野を広げていく。難しいことではありますが、そうすることで常に物事を別の視点から思考する経験を、また一見関係のない知識が気づくかぬうちにつながり合う経験を、学生と共有できればと考えています。



本学科教員 小滝 陽

はじめまして。小滝陽（こたきよう）と申します。私は、アメリカ合衆国の現代史を研究している者ですが、日頃、自分が研究を通して、どんなことを考えているのか、少し、ご紹介します。

私が注目する対象の一つは、アメリカの傷痍軍人（障害のある元軍人）です。20世紀を通して他国への軍事介入と戦争を繰り返してきたアメリカでは、兵士のための福利厚生制度が発達しています。なかでも、傷痍軍人や戦死者遺族に対しては、その献身と犠牲に報いるために、比較的手厚い支援が行われてきました。また、テレビやネットの広告には、しばしば「模範的なアメリカ人」として、傷痍軍人と家族の姿が映し出されます。こうした広告は、国民が傷痍軍人を支持することを通して、アメリカ軍とアメリカの戦争をも支持するように訴えます。

一方、国家の英雄として称賛を浴びる傷痍軍人とは異なり、アメリカ人の「反面教師」と位置づけられ、蔑まれてきた者もいます。例えば、貧困や病気などの理由で、福祉を受け取る人々です。彼らは、しばしば、「他人に頼る怠けもの」と非難され、「あるべきアメリカ人」の範疇から外れる存在とされてきました。その対極には、懸命に働き、家族を養う、「自由で自立したアメリカ人」の理想があるとされます。

さて、アメリカ人の模範とされる傷痍軍人と、反面教師とされる福祉受給者は、互いに正反対の立場にあるように思えますが、実際には、両者の境界線は流動的です。福祉を受け取る人を蔑む社会では、例え傷痍軍人であっても、「自立」していないと見なされた途端、反面教師や厄介者扱いされ、非難されるかもしれません。そもそも、「自立」を定義する社会的な基準自体が、しばしば変化します。

私は、このように、「あるべきアメリカ人」とそうでない存在を差別化・序列化し、ある者を持ち上げたり、見

下したりする、時代ごとの文化のあり様に興味を持っています。ある社会において、何が／誰がほめたたえられ、あるいは、非難されるのか？その背景には、どんな価値観があるのか？そうした価値観は、どのようにして形成されるのか？こうした問いについて考えるとき、私は、それなりに確からしく思っていた自分自身の価値観も、歴史的に「作られた」一過性のものに過ぎないのではないかとの思いを禁じ得ません。学生の皆さんにも、アメリカを考えることを通して、自分と自分を取り巻く社会の価値観を、批判的に省みてもらえたらと思っています。



## 本学科教員 西尾 知己

こんにちは、西尾知己（にしおともみ）です。今年度から日本史を中心とした分野の担当教員としてこの大学にお世話になることになりました。これまでおもに日本の中世（12～16世紀頃）において寺院がどのように運営されていたのか、といったことを研究してきました。

歴史というと、織田信長・豊臣秀吉のような政治や外交などの場でなんらかの業績をあげた人物が頭に浮かぶと思うのですが、私の研究ではそういった有名人は登場することはほとんどなく、無名の人々の活動に注目しています。かれらの生涯はもちろん信長のように華やかではありませんが、さまざまな問題に直面する彼らの生活を見てみると、当時の社会や文化を知るうえで、さらには現代の社会というものを考えるうえでもさまざまなヒントが隠されているように思われます。そんなことを考えつつ、勉強を重ねてきました。

大学の学問では、たくさんの知識を広く集めるだけでなく、1つのことに注目して、深く掘り下げて考えていくことが求められます。このうち歴史という学問は、とくに自分の人生では体験しきれない長い時間のものさしをつかって、ものごとを深く掘り下げる学問であり、そのなかでも特に日本史は自分が普段生活している足もとをその長い時間のものさしで掘り下げていく学問である点に特徴があります。みなさんは、普段の生活のなかで、「なんでこんなものがこんなところにあるんだろう？」「いつも疑問を持たずやっているけどなんでこんなことを私はやっているんだろう？」「なんでこれはこんな名前がついているんだろう？」というように、さまざまなものごとの由来が気になったことはないですか。そのような興味を持った人は日本史向きかもしれません。ぜひ私の研究室を一度訪れてみてください。いっしょにその由来をしることのできるものを探していきましょう。

## 秋学期集中講義「外から見た日本」

### 本学科教員 鄧 捷

2月6日～8日まで、秋学期集中講義「外から見た日本」が開講し、中国の南京師範大学日本語学院の林敏潔先生が担当しました。林先生は中国文学、日中比較文学の研究者で、中国では民主党派の一人として積極的な社会活動も行う先生です。授業に参加した学生は15名でした。パワフルな林先生は、初日に大きな旅行カバンをもって教室にやってきました。カバンから魔法のようにたくさんのお菓子やお茶が出されて、受講生とともに心を開いて会話を交わし、楽しく授業を行ったようです。中国も日本も知り尽くした林先生の学知、若者への叱咤激励はきっと受講生に深い印象を残したことでしょう。



## 卒業論文の口頭試問を終えて

本学科2018年度卒業 山本 智也 (鄧捷ゼミ)



私は、『草の根から考える日中NGOの比較』というテーマで卒業論文を執筆しました。このテーマに至った理由は、学生生活の中でのボランティア経験や、2年次でのワールドスタディから、中国における民間団体に興味を抱いたためです。

実際に卒業論文の制作を進めていく中で、論文における文章の形式の再確認や、資料の収集法、また、意見を主張するための根拠となる部分をどう論文の中に落とし込むのか、といった困難もありましたが、指導教官と定期的に相談をし、改善点の指摘などのアドバイスをいただき、卒業論文を完成させることができました。

卒業論文を提出した後の口頭試問では、自身のゼミの先生と他のゼミの先生の二人から、自身の卒業論文に関しての質問や、論文の範囲や分野に関しての指摘、また、参考文献の年代や種類についての指摘など、自身の視点とは別の視点からのアドバイスや感想をいただきました。こういった形で、自身の論文を担当外の先生に実際に読んで評価していただくという体験は学生生活の中で口頭試問でしか味わうことができないことだと感じました。また、学生生活において、与えられたテーマではなくテーマ設定から行った卒業論文は、これまでの学習の集大成と呼べるものであるとも考えています。自分の論文が口頭試問を終え完結した時の達成感も口頭試問で味わうことができました。卒業論文の作成はそういった意味でも価値のあることだと実感しました。

本学科2018年度卒業 塚田 麻未 (矢嶋ゼミ)



私は日本人の謙遜文化をテーマにして、卒業論文を書きました。日本人はどうして遠慮勝ちな態度をとってしまうか歴史的な背景を見ながら、現代にどう影響したかを日本史研究の矢嶋ゼミナールの学びをもとにテーマを設定しました。

卒論作成を作成するにあたって、テーマ選びは非常に重要なものになります。自分の卒論テーマを設定する時、趣味などを中心に興味関心のある分野を設定し、またゼミナールの専門分野をもとにテーマを決めて書いてみましたが、いざ書き始めてみると思うように追及出来ず、章が思うように展開していくことが出来ず、4年生の春にテーマを変えて挑むことにしました。しっかりと学問分野を定めないと、展開を考えること、また文献や参考資料探しに苦戦することになります。そこで、テーマ選びでお勧めしたいのは、今まで受けてきた関心のある講義をピックアップしておくことです。興味関心を絞っておくことで、自分なりのテーマの設定にも繋げることが出来ます。その為にはきちんと講義内容を理解をしたうえで、講義で貰った資料や教科書なども捨てずに保管しておき、シラバスで講義の参考資料を確認すると文献集めに大いに役立つと思います。

就職活動時期と重なって大変な作業かと思います。学部で4年間学んだことの集大成ともいえる卒業論文は、自分の大学での学びを残すものとなりました。